関越え考
――『おくのほそ道』細注

宮脇真彦

一　越えがたさ

関所は、治安と秩序を守るため、それぞれの国境に置かれて人や物の移動を制限した。旅人にとってそこは、通行手形を提示して、旅する自身を問われる場であった。『おくのほそ道』においても「関」は、それゆえ越えがたい場所として語られている。

関の越えがたさが顕わに語られるのは、陸奥と出羽との境、尿前の関においてである。

南部道遥にみやりて、岩手の里に泊る。小黒崎、みづの小島を過て、なるごの湯より尿前の関にかゝりて、出羽の国に越んとす。此路旅人稀なる所なれば、関守にあやしめられて、漸として関をこす。大山をのぼつて日既暮ければ、封人の家を見かけて舎を求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云、是より出羽の国に、大山を隔て、道さだかならざれば、道しるべの人を頼て越べきよしを申。さらばと云て、人を頼侍れば、究竟の若者、反脇指をよこたへ、樫の杖を携て、我〳〵が先に立て行。けふこそ必あやふきめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして後について行。あるじの云にたがはず、高山森々として一鳥声きかず、木の下闇茂りあひて、夜る行がごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏み分け〳〵、水をわたり、岩に躓、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せしをのこの云やう、此みち必不用の事有。恙なうをくりまゐらせて、仕合したりと、よろこびてわかれぬ。後に聞てさへ胸とゞろくのみ也。(1)

この関越えでは、まず、関守に咎められてようやくのことで関を越えたことを伝えている。諸注、旅に同行した曽良の『曽良随行日記』に、この関について「関所有、断六ヶ敷也。出手形ノ用意可有之也」と書かれているのを根拠に、ここは関所を通るための出手形の準備がなかったために咎められた、と解している。事実は、おそらく曽良の記すとおりであったにちがいない。だが、本文はそういう理由で、関所を通過しがたかったとは言っていない。「此路旅人稀なる所なれば」と本文にあるように、人の往来が珍しい道であるため、かえって検問が厳しかった、という意でなくてはならない。以下述べられるように、ここは険阻な、道なき道があるばかりで、危険な目にあっても不思議でない道なのだ。それゆえ、通行人もいない。そんな道を通ろうとするので怪しまれたのである。「関守にあやしめられて…」は、出羽への道がいかに往来の稀な道なき道であるかを表現しているわけだ。

越えがたさは、次に「三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す」と天候によって難儀を強いられる形で語られる。「よしなき山中」とは、泊まるに値する場所ではないこと。風雨に足止めされたというだけだということをことさらに強調した措辞である。

「蚤虱馬の尿する枕もと」は、その「逗留」した家での感慨を句にしたもの。一句は、蚤や虱、その上馬の小便を枕元間近に聞くことだ、の意。「蚤」「虱」「馬の尿」と粗末な宿でのつらい旅寝をことさらにかき

立てるような句作りは、「馬の尿する枕もと」に地名「尿前」を利かせて、まさに「尿前」の名のとおりの旅寝だったと、風雨に閉じ込められた三日間をまとめての感慨を伝えてくる。地名とは、他と区別してその場所を示す記号にすぎないが、名付けの始源においては、なんらかの現実を反映したものだった。その意味で、「蚤虱…尿する枕もと」は、地名から喚び起こされるイメージを現実の旅寝に重ねて、地名「尿前」とその名付けの始源において関わった旅人の姿を表したものと言っていい。そうした表現の仕組みが、一句を旅寝の苦痛よりも、侘びしい旅寝を味わっているような心情を伝えてくるのだ。

次いで出羽への大山越えとなる。その道はまず宿の主人の言葉に「道さだかならざれば、道しるべの人を頼て越べき」とあるように、わかりにくい道なので、道案内が必要と語られる。「道さだかならざれば」という言葉は、道に迷って石巻に出た、次のような経験を語り手に喚び起こすものだったろう。

人跡稀に、雉兎蒭蕘の往かふ道そこともわかず、終に路ふみたがへて、石の巻といふ湊に出。

実際、大山越えでは、「木の下闇茂りあひて、夜る行がごとし。…篠の中踏み分け〳〵、水をわたり、岩に蹶、…、最上の庄に出づ」とその道なき道の様子が語られている。語り手にとっても、また読者にとっても、石巻の経験を喚起することは、そのまま大山越えの越えがたさを心理的に印象づけることになる。

だが、旅人が不安に思ったのは、そればかりではない。道案内として登場した者は、「反脇指をよこたへ、樫の杖を携」るという「究竟の若者」であって、その若者の様子に「けふこそ必あやふきめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして後について行」くことになるからだ。幸いその予測は裏切られ、無事に最上に出るわけだが、後から「此みち必不用の事有。恙なうおくりまいらせて、仕合したり」という若者の言葉によって、改めてその危険を反芻することになる。「後に聞てさへ胸とゞろくのみ也」という締めくくりの一文は、この大山越えが危険で険しい道なき道であったことを印象的にまとめる働きをもっている。[2] 恐怖の体験は、三日間風雨に足止めされたことと併せて、尿前の関の越えがたさをことさらに印象づけ、前段までの感興とこれから足踏み入れる出羽路とを明確に分け隔てる。出羽は、「最上の庄に出づ」と、難所を抜け出た所に見いだされることで、陸奥とは実際の距離以上に、遥かに隔てられた場所として定位されることになる。

陸奥「武隈の松」に「千歳のかたち」を見て以来、「壺の碑」に「疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す」と感激し、「塩がまの明神」の「古き宝燈」に刻まれた「文治三年和泉三郎奇進」を「五百年来の俤、今目の前にうかびて」と賞翫し、平泉中尊寺の「光堂」を「暫時千歳の記念とはなれり」と嘆賞するように、松島から平泉へと至った陸奥の旅路は、長い年月にかろうじて残った遺物に創建当時の古人の心をまざまざと見極めてきた旅路だった。『おくのほそ道』の旅でいわゆる不易流行について論評されるのも、この「千歳の記念」を繰り返す陸奥の旅路での印象が大きく働いていると言わざるを得ない。その「古人の心を閲す」旅人の姿は、この険路に難渋する尿前の関から大山越えの〈越えがたき〉関を通過することで新たな形に変容してゆくのである。[3]

二　険路と道案内

尿前の関に関わって、もう少し見ておこう。関越えで泊まった「封人の家」の様子は、「三日、風雨あれて、よしなき山中に逗留す」や「蚤虱馬の尿する枕もと」の発句に表現されているとおり、まことにいぶせき旅宿であったわけだが、その描写には、陸奥に入ってまもなく体験した飯塚の夜との類似性が指摘されてきた。

其夜飯塚にとまる。温泉あれば、湯に入て宿をかるに、土坐に莚を敷て、あやしき貧家也。灯もなければ、ゐろりの火かげに寐所をまうけて臥す。夜に入て、雷鳴雨しきりに降て、臥る上よりもり、蚤・蚊にせゝられて眠らず。持病さへおこりて、消入計になん。短夜の空もやう〳〵明れば、又旅立ぬ。猶夜の余波、心すゝまず。馬かりて桑折の駅に出る。遥なる行末をかゝへて、斯る病覚束なしといへど、羇旅辺土の行脚、捨身無常の観念、道路にしなん、是天の命なりと、気力聊とり直し、路縦横に踏で伊達の大木戸をこす。

（飯塚）

ここは、白河の関を越えて陸奥に入り、須賀川から浅香山、信夫の里、佐藤庄司が旧跡と旅してきたところにある。須賀川を発って以来、旅人は「人々に尋」「かつみ〳〵と尋ありき」（浅香山）、「しのふもぢ摺の石を尋」（信夫の里）、「尋〳〵行に」（佐藤庄司が旧跡）と、ことさらに歌枕の景物や旧跡を尋ねてきた。それが、浅香山では尋ねても分からず、信夫の里では尋ねて教えられたが「石の面下ざまにふしたり」と満足な結果が得られず、佐藤庄司が旧跡に至ってようやく「丸山と云に尋あた」り、「人の教ゆるにまかせて泪を落」すと満足した形で語り分けられる。いわば、〈問―答〉がフーガのように奏でられている部分である。それは、この飯塚の一夜を挟んで、次の「笠島」まで奏でられ、そのまま「千歳のかたち」に古人の心を現前させる旅のテーマが表れる、「武隈の松」に接続しているのである。[4]

いわばそれは、時を経て変わらずに残っているものを尋ね、そこに古人の心を現前させる旅人のスタイルによって、「陸奥」という場所が、遠く古代の記憶を遺して今ある土地として『おくのほそ道』の中に定位されているということだ。そのような「陸奥」という場所に旅人が馴染んでゆくプロセスにおいて、この「飯塚」の一夜があるわけだ。この一夜の「持病さへおこりて」について上野洋三氏は、「より現実的に古蹟の現況を記述した結果が、ただちに人物の現実にまで、主人公の肉体的現実にまで遡及しないでは済まないのである」と述べ、「発病は、異郷に入って、主人公が免疫と具体性を獲得するために、まったく文章としての環境が、しからしめたもの」と論じている。[5] すなわち、陸奥の地を旅するにふさわしい旅人として語り手が変容するための装置が、この飯塚の条であったわけである。

問題を関越えの表現に即して敷衍するならば、尿前の関の表現には、この飯塚での一夜が踏まえられていると見るべきだ。飯塚では、旅する身体の比喩的死を経て、陸奥を旅する旅人として再生したが、尿前の関と大山越えでも、繰り返し語られる危険においてまさに死地を行く感覚が語られる。尿前の逗留が、「よしなき山中」「蚤虱馬の尿する枕もと」として語られながら、そこに旅に難渋する旅人の姿を思い描くところには、「土坐に莚を敷て、あやしき貧家」において「蚤・蚊にせゝられて眠らず。持病さへおこりて、消入計になん」と旅のつらさを語った旅人の姿が重ね合わされる。関越えにあたっての「よしなき山中」での難渋と大山越えでの死地を行く感覚とに特徴的な尿前の関前後の叙述は、陸奥を旅してきた旅人が比喩的に死んで、出羽を旅する旅人として生まれ変わってゆくための装置として機能しているのである。

もちろん、前述したように、単にそれを省略しつつ、繰り返しているのではなく、ここ尿前の関では、「尿前」という地名を地で行く体験が、「尿前」を味わうごとく語られて、飯塚との差異を明確にしていることは注意しなくてはならない。同様のことは、死地からの回復においてもいうことができ、飯塚とは異なる旅の形が提示されている。すなわち飯塚では、自身「…道路にしなん、是天の命なりと、気力聊とり直し、路縦横に踏で、伊達の大木戸をこす」と立ち直っていったわけだが、ここ尿前の関では、道案内の「反脇指をよこたへ、樫の杖を携」えた「究竟の若者」に導かれるようにして、死地からの脱出が成し遂げられてゆく

のである。

陸奥の旅路では、「路縦横に踏で、伊達の大木戸をこす」と立ち直るのに対応して、「…に行く」「…を志す」など目的設定式の旅路が展開した。その旅路と比較して大きな変化がここにある。すなわち、この道案内に導かれて険路を行く旅人の姿が、大山越え以降、出羽での旅では特徴的なスタイルとなるわけだ。[6] 例えば、立石寺参詣は、土地の人々の勧めに導かれてのことで、予定にはない旅路であった。「尾花沢よりとつて返し、其の間七里…」と、予定との異なりが大きく印象づけられる。そして「岸をめぐり、岩を這ひ」という険阻な道をやっとのことで登る動的な視点で語られる寺内は、「殊に清閑の地也」という人々の言葉を一つ一つ自身の体験によって捉え直しつつ、その果てに思いがけず閑寂な世界を見いだすという語り手の姿を示している。

また最上川は、尾花沢・立石寺と出羽三山の間、三山・鶴岡と酒田の間に語られることで、出羽の各地域はすべてこの最上川水系として一つに繋がるよう位置づけられている。そしてその船下りは、五月雨の圧倒的な水量を背景にして「涼」のイメージをかき立てる。ここでは、「最上川上れば下る稲舟の…」（『古今集』）と詠まれた歌枕「最上川」の「稲舟」を、「水みなぎつて舟あやふし」と、危険を我が身に感じての船下り体験として捉え直している。急流は、険阻な旅路の一変奏であり、川の流れに身を任せる船下りはさすらいの一型でもある。

月山登山は、「強力」に先導されて、「氷雪を踏んで」登る険しい道と、「息絶え、身こゞえ」る程の霊山の冷気が印象づけられ、「日月行道の雲関に入るか」と怪しまれるような予想外の世界へと導かれたと語られる。ここにも、出羽路に特徴的な、人に導かれて険路を行く涼しげな旅路が織り込まれている。

羽黒から鶴岡への旅路は、羽黒山への案内をしてくれた左吉が鶴岡へも案内してくれ、長山重行という武士の家に迎えられるままに滞留する。ここには、自身の意志ではなく案内されるがままの旅路が語られる。滞留先の叙述も「鶴が岡の城下、長山氏重行と云ふ物のふ」とあり、俗世間に下りてきたことを印象づけるとともに、本文に登場する人物が、陸奥でのような風雅の旅路に合わせて脚色された呼称ではなくなり、その土地の生活者として登場してきている点に注意したい。「誹諧一巻有り」とは、羽黒での法楽と截然と分けつつ、市井の人々との交流を示して、旅も風雅も肩肘張らない自在さを獲得してきていることを物語る。

最上川を川舟で酒田に下り、川の淵に留まるかのように淵庵不玉という医師（職業名を示すのも鶴岡と同様）のもとに泊まる。この語り方も、いかにも川の流れに任せたさすらいを印象づける。

かくして、険路を人に導かれるようにして旅する語り手の姿は、出羽の地を旅する間、その行く先々での旅のあり方を特徴づける姿だったということができる。その意味で尿前の関から大山越えの章段は、まさにその後の出羽の地での旅のスタイルを提示して叙述するように語られているのであった。

三　離別の旅路

「このたび松しま・象潟の眺め共にせん」と語られた旅の目的地、象潟を後にしての旅路は、次のように新たな旅立ちとして語られている。

酒田の余波日を重て、北陸道の雲に望む。遥々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞。鼠の関をこゆれば、越後の地に歩行を改て、越中の国一ぶりの関に到る。此間九日、暑湿の労に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河　（越後路）

この旅は、旅の途からの旅立ちとして語られ、いよいよ語り手は〈旅

から旅へ〉を地で行く旅人として登場してくることになる。「加賀の府まで百卅里と聞く」といった語り方は、「加賀の府」という目的地が、旅の当初の目的地として記された松島や象潟とは異なって、旅の途次に設定された、とりあえずの目的地というに過ぎないことを伝えてくる。以下同様に、目的地の設定は、「けふは越前の国へと、心早卒にして堂下に下る」（全昌寺）、「その家に二夜とまりて、名月はつるがのみなとにと、たび立つ」（福井）など、旅の途次におけるその日の目的地、あるいは数日後の目的地として記述されているにすぎない。「長月六日になれば、伊勢の遷宮をがまんと、又、舟にのりて」（大垣）という『おくのほそ道』の締めくくりの一文も、更なる目的地を記して、大垣での旅の終わりが、次なる旅への一通過点にすぎないことを逆に示す形をとって一貫しているのである。

目的（地）をもって始まる旅は、目的地との往還が済めば再び旅人は日常に戻る。〈往き〉と〈還り〉の旅路である。それに対して、旅から旅へとさすらう〈漂泊〉は、日々旅にして帰着と出発を繰り返す旅路である。そうした漂泊の旅路への変容は、飯塚の条の病、尿前―大山越えの危難を反芻するごとく、「暑湿の労に神をなやまし、病おこりて、事をしるさず」と語られる。上野洋三氏は飯塚の条と越後路とに病が語られていることに着目して、「二度の病は、異郷への、いわば進入同化の過程において、と、そこからの、出離還帰の過程において現出した」、異郷を前後と区別する構成と論じられた。[7] だが、この病は、それのみならず、出羽路から北陸路への旅の変容をも語る病として機能しているというべきだろう。すなわち、導き・導かれての旅路から、漂泊への旅路へと変わってゆく境界を形作っているのである。「一ぶりの関」（以下、市振の関と略称）は、その境界として語られている。

今日は親しらず子しらず、犬もどり、駒返しなど云、北国一の難所を越て、つかれ侍れば、枕引よせて寐たるに、一間隔て、面の方に若き女の声、二人計ときこゆ。年老たるをのこの声も交て、物語するをきけば、越後の国新潟と云所の遊女なりし。伊勢参宮するとて、此関までをのこの送りて、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言伝などしやる也。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、定めなき契、日々の業因、いかにつたなしと、物云をきく〳〵寐入て、あした旅立に、我〳〵にむかひて、「行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覚束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍ん。衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ給へ」と、泪を落す。不便の事には侍れども、「我〳〵は所々にてとゞまる方おほし。只人の行にまかせて行べし。神明の加護、かならず恙なかるべし」と、云捨て出でつゝ、哀さしばらくやまざりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月

曽良にかたれば、書とゞめ侍る。（一振）

「親しらず・子しらず…」と冒頭記される「北国一の難所」を越えての疲れは、〈関越え〉における険路のパターンを踏襲したものである。前章の暑湿・病気と相俟って、出羽路での感興を記憶の彼方に追いやってゆく。

市振の関での様子は、「一間隔て、面の方に」泊まり合わせた遊女に即して語られる。前半は、一間隔てた部屋から聞えてくる声において展開する別れの場面である。見送りの老人と遊女たちとの別れを惜しんでいるのは、ここが越後の遊女たちにとって越中へと足踏み入れる境であり、見送りの男が遊女たちと別れて戻る境にあたることを前提としている。その別れが、彼女たちを望郷から自身の境涯の述懐に駆り立てる。遊女たちの離別をかこつ言葉の内に、旅人にとっての〈関越え〉の越えがたさが反芻されてゆくのである。

市振の関の後半は、この遊女たちと語り手との関わりが語られる。す

なわち、彼女たちが「見えがくれにも御跡をしたひ侍らん…結縁せさせ給へ」と申し出たのに対して、語り手は「不便の事には侍れども、我々は所々にてとゞまる方おほし。只人の行くにまかせて行くべし」と拒否して遊女たちと別れてゆく。ここにも、一夜の出会いと別れが語られ、この市振の関が離別の場であることを印象づけている。

「我〳〵は所々にてとゞまる方おほし」とは、自身の旅路を語ったもの。それに対して「人の行くにまかせて行くべし」とは、各々の旅路を行くしかない旅の提示にあたる。重要なのは、語り手が人々の旅路を意識して、自身の旅路を相対化していることだ。遊女の旅路において示される「伊勢参宮」が、やがて語り手等の旅路へと重ねられてくることになる。

以下展開する加賀の旅路では、伊勢への旅を軸にして、それぞれが自身の旅路へと別れつつ、離別がことさらに語られてゆく。[8]

魂祭りの日に訪れた金沢では、「此道にすける名のほの〴〵聞えて、世に知人も侍し」と紹介される俳人一笑が、「去年の冬早世し」、追善の会が催された。一笑との交流は、もし生きていたならば「此道にすける」者同士の風雅を尽くせたであろうに、それが喪われた形で、すなわち死を介した追善という形を取って行われるしかなかった。「塚も動け我泣声は秋の風」の発句は、塚を吹く秋風に我が慟哭の声が一体化して、この傷心が地下の一笑の魂を感応させよというので、まさに喪われた風雅の交渉を生死の境界を超えてなさんとする呼びかけである。

山中温泉に続けての章では、同行曽良との別れが次のように語られる。

曽良は腹を病て、伊勢の国長島と云所にゆかりあれば、先立て行に、

行き〳〵てたふれ伏とも萩の原　曽良

と書置たり。行ものゝ悲しみ、残ものゝうらみ、隻鳧のわかれて雲にまよふがごとし。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露（山中）

「伊勢の国長島」に「先立て行」く曽良の旅立ちは、市振での遊女らの旅を想い起こさせる。遊女らの旅は「伊勢参宮する」ための旅であり、曽良の旅は「腹を病て」「ゆかり」を頼っての旅と、その目的を異にしながらも、遊女らの旅をなぞるように伊勢への旅立ちとその離別が繰り返される。

注意したいのは、曽良の留別吟・語り手の送別吟が、旅立ちに際しての応酬ではないということである。すなわち曽良の留別吟は「書置たり」と記され、語り手はその「書置」かれた句を見て、すでに旅立って行ってしまった曽良と自身との別れを、残された者としてかみしめているのである。

いったい、市振で「只人の行にまかせて行べし」と「云捨て出」たのは、ほかならぬ語り手であった。その語り手を残して、曽良は句を書き置いたまま先立って行ってしまう。市振で「云捨て出」た後、「哀さしばらくやまざりけらし」と残された側の遊女を思いやっていた語り手は、その旅立ちにあたっての心情と遊女の「哀さ」とを、二つながら我が身の上に引き受けて、「行ものゝ悲しみ、残ものゝうらみ…」と離別の心情を語っているのである。この曽良との離別には、曽良に旅立たれ残された者としての別れをかみしめつつ、旅する者として自らの旅路に旅立つという、前後しつつ互いの旅路に旅立つ者の離別が書かれているのである。それはちょうど、市振にあって、「我」が旅立った後に伊勢へと旅立ったであろう遊女らとの関係を反芻するかのようである。

加賀・越前の国境では、語り手を慕って旅路をともにしてきた金沢の北枝との別れが語られる。

丸岡天龍寺の長老、古き因あれば尋ぬ。又、金沢の北枝といふもの、かりそめに見送りて、此処までしたひ来る。所々の風景過さず思ひつゞけて、折節あはれなる作意など聞ゆ。今既別に臨て、

物書て扇引さく余波哉

「尋ぬ」という「予」の行為に続けて「したひ来る」北枝を描くことで、次々に尋ね行く自らと、そうした「予」に慕い来る北枝という二人の関係がまず示される。ついで北枝のここまでの風雅の旅路が簡潔に紹介されるが、ここまで北枝の存在が文の片端にも示されてはいなかったことを確認するならば、「今既別に望みて」という北枝の登場は、国境における別れにのみ用意された同行者だということを示していよう。

発句の「扇引さく」とは、夏涼を得るための扇が、秋涼ゆえに手にしなくなることをいう「扇置く」「扇捨つ」を踏まえ、扇を二つに裂いて彼此がその片割れを持つという意で、別れを惜しむ様を詠んだ句。引き裂かれるごとき別れの悲しみが示される。と同時に、この「物書て」与える行為は、「此関までおのこの送りて、あすは古郷へかへす文したゝめて」（市振）いる国境市振での、遊女らと見送りの男との別れを踏襲する行為でもある。

かくして、加賀の旅路は、旅人がぞれぞれの旅路へと別れつつ、離別を噛みしめる旅路だった。目的のない漂泊は、〈今・ここ〉から別れることを自覚するばかりだ。市振の関での遊女との離別は、加賀の地におけるそれぞれの旅路を行く旅と、離別とを提示するエピソードなのだった。

四　白河の関

〈関〉とは、国と国との境界である。それ以前の世界の果てであると同時に、新たなる異郷への入口である。したがって関はそれ以前を記憶のかなたに遠く押しやりながら、いよいよ新たな世界へと踏み出してゆく場として造型される必要があった。そのために、何らかの苦難をともなう場として意識されたのである。関越えが〈越えがたさ〉として表現され、かつそれぞれの関で越え方がその後展開する旅路を特徴づける、という『おくのほそ道』における関越えの文法は、そうした関の機能を文章自体に定着させるべく巧まれたものだったと言っていいだろう。

そう考える時、例えば尾形仂氏が山本健吉氏の言葉を借りて「古歌の洪水」と評されたように[9]、現実の関の様子をほとんど述べることなく、古歌をふんだんに用いて語った白河の関の意図も見えてくる。

心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝりて、旅心定りぬ。「いかで都へ」と便求しも断也。中にも此関は三関の一にして、風騒の人心をとゞむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣装を改し事など、清輔の筆にもとゞめ置れしとぞ。

卯の花をかざしに関の晴着かな　曽良

白河の関は、関としての機能を持っていない場所となって久しい。すでに平安時代には古関というにすぎなかった。それどころか、白河の関がどこにあったかも明らかになっていない程度の、廃れた古蹟だったのである。関越えの越えがたさを言おうにも、拠るべき具体的な場が失われていたと見て良い。その白河の関を通過するためには、かつて困難であった時点に自身立つ必要があったのである。それは、困難な白河の関越えを体験した歌人たちの思いを自身の思いとして関越えする、という趣向だった。曽良の「卯の花を」の発句は、能因の「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞふく白河の関」（後拾遺集・羇旅）に敬意を払った竹田大夫国行の関越えを今にもどくことで、まさに歌人たちの白河の関越えの感慨を共有しつつ、関越えの容易ならざる様相を演出していたのである。と同時に、古蹟に古人の心を見、古人の心を共有する姿勢は、以下展開する陸奥の旅のスタイルそのものだったということも、関越えの文法として指摘するべきことだったのである。

注

（1）本文は西村本を底本とする岩波文庫『おくのほそ道』（萩原恭男校注、昭和54年）による。ただし、歴史的仮名遣と齟齬するものはこれを直し、原表記を振り仮名に示した。

（2）上野洋三氏に、この大山越えの描写が「この世ならぬ危険の強調」であり、陸奥から出羽へ出ることが重大な事件であることを示す、という指摘がある（「前後の対照について―『奥の細道』の構成一―」『芭蕉論』筑摩書房、昭和61年）。

（3）陸奥の旅路については、拙稿「眼前、古人の心―『おくのほそ道』平泉考」（右文書院『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ』［古典編］4、平成15年1月）に、総括的に論じた。

（4）この章段の意味については、上野洋三氏「前後の対照について―『奥の細道』の構成一―」（『芭蕉論』筑摩書房）参照。私もそれを「名所訪尋の展開―『おくのほそ道』陸奥路・序章―」（「立正大学文学部論叢」一一五号、平成14年3月）で詳しく自分なりに考えてみた。

（5）注（4）参照。

（6）出羽の旅路については、拙稿「涼の別天地を行く―『おくのほそ道』出羽考―」（「日本文学」平成7年2月）で詳述した。

（7）注（4）参照。

（8）加賀の旅路については、「離別と漂泊―『おくのほそ道』加賀考―」（「日本文学」平成7年10月）で詳述した。

（9）『おくのほそ道評釈』（平成13年5月）。